

# 『余地』

～相談業務を楽しむ方法 22～

## <『叩くな』と言われても>

杉江 太朗

### ～目の前に一本のボールペンがある～

昔、私と同じ援助職として従事するAが、『目の前に一本のボールペンがあったとして、それがボールペンであるかどうかを確かめるために、第三者にどうやって質問をするかと常々考えている』と話していた。

正直、話の流れも覚えていないし、Aがどんなニュアンスで話していたのかも覚えていない。普通であれば、「これはボールペンですか？」と聞くのかな・・・と思いながら、Aの話の話を聞いていると、ありきたりな質問では面白くない、例えば、「それはボールペンですか？」と質問しても、そんなことは、誰が見てもわかるし、質問をされた側も、「当たり前」「それが何か」と思うだけで、質問をしている人への興味や関心を生むことはないだろうとのことであった。

その考えに答えがあったのかどうか等も覚えておらず、何が正解なのか、そもそも正解があるのか等何もわからないまま、Aとのやり取りのみが記憶に残っており、そのことを私も常々考えるようになった。

ただ、ニュアンスが合っているのかわからないが、ふと似たようなことを考えることがあった。それはタイトルにある『叩くな』というやり取りである。

### ～『叩くな』と言われても～

ネットやテレビでは、児童虐待が深刻化していると言われ、その件数が右肩上がりであること、その件数のうちのセンセーショナルな数件を取り上げ、それが全てであるかのように報道され続けている。視聴者の興味を得るためにそのような手段となりつつあるのであろう。そうした報道では、暴力がしつけの延長であったと言われ、しつけであっても暴力は虐待である、虐待はいけない、子どもへの暴力はダメだと繰り返し伝えられる。

例えば、目の前に「子どもに怪我をさせた親」がいたとする。その親に対して、「叩くな」と伝えたとして、どれだけの人がその行為を止められるだろうか。煙草にせよお酒にせよ、「やめなさい」「ダメだ」という禁止言葉だけでやめられたら苦勞はしない。暴力も同じで、禁止するだけで暴力がなくなるのであれば、二

ユースで「叩いてはいけません」と流し続ければ解決するが、実際はそうではない。さらに、叩いている側からしても、「叩いてはいけない」ということは、小さな頃から繰り返し言われてきただろうし、その人もわかっていることかもしれない。それでも叩くと言う行為はなくなるならない。私には、この「叩くな」という言葉が、「これはボールペンか？」という言葉に聞こえてしまっている。

#### ～目的は叩くことをやめてもらうこと～

叩くなと言われて叩かなくなるのであれば、そんなに簡単なことはない。それで叩く人がいなくなれば、私の仕事は廃れていく一方のはずだ。叩くという行為を肯定するわけではないが、叩くに至った理由やきっかけは、いったい何なのであろうか。叩く前には何かきっかけがあったのではないか。さらにきっかけがあったとしても、全ての人が叩くかと言われるたら当然そうではない。叩く前には何らかのその人なりの気持ちの動きがあったはずである。ということは、叩く前には、何らかの気持ちの動きがあり、気持ちが動く前には何かのきっかけがあったということになる。何か『きっかけ』があり、『気持ち』が動き、『結果』として、叩いてしまうのである。このことを、刺激（きっかけ）、思考（感情、気持ち）、結果（行動）に分けて考える人もいるのではないだろうか。

「しつけのために叩いた」とか「あくまでもしつけだ。」という言い分を聞いたことはないだろうか。今は、しつけであろうがなかろうが暴力は許されないのであるが、そういったときに、その人に「叩くな」と伝え暴力を否定してしまうと、その人なりの「しつけをしなければならない」という気持ちまで否定して伝わってしまうかもしれない。そうなれば相手からは反発しか得られない。この業界の目標は、叩くと言う結果をなくすこと、言い換えれば、叩くという結果を別の方法に置き換えてもらうことである。叩くという行為に至ったきっかけや経緯、その気持ちの動きは否定せず、叩いたという行為のみ否定し、何か別の手段に置き換える。そんな風に、プロセスは否定せず、結果のみを置き換えることが出来たなら、結果として叩くという行為がなくなることに繋がっていくかもしれない。

東京から京都に行くには、新幹線、普通列車、飛行機、自動車、バス、タクシー、徒歩、ヒッチハイクなど様々な方法がある。ここでは、結果として京都に着けば問題ないという考え方をする。徒歩で京都を目指すことは、適切だとは思えないが、そのことを否定してしまうと、京都に行くという目的そのものまで否定してしまうことになりかねない。

では、「叩くな」というやり取りをめぐって、どのような言い方（=バリエーション）があるのか考えてみたいと思う。

## ～私流、対応のバリエーション～

### 《心配事を伝える》

例えば、叩く行為が続くことでどんな心配があるだろうか。当然、子どもが怪我をするということが一番懸念されることではあるが、このご時世、叩いたという結果が警察に伝わってしまうと、叩いた張本人が逮捕されてしまう可能性がある。

『それ以上叩いて、もし警察に伝わってしまうと、逮捕されてしまうかもしれない』『〇〇さんには逮捕されて欲しくない』『警察に捕まらないように別の方法を考えていきましょう』

要は「叩いて欲しくない」ということなのであるが、行動を咎めることを前面に出さずに、行動の行く末を心配して伝えるのである。

### 《例外を探す》

子どもを叩く人が、24時間ずっと子どもを叩いているかと言えばそうではないはずである。叩かない時間や叩かないこと（例外）もあるはずである。では、どんな場面では叩かずに済んだのであろうか。

『叩かずに済んだときはどんなときですか？』『いつも叩いているわけではないと思います。叩いたときと叩かなかったときはどう違うのですか？』

子どもが死んでいない以上、そうでな

い行動を用いた場面は必ずある。そのことを聞きだすことで、適切ではない行動を、適切な行動に置き換える意識付けを行えるかもしれない。

### 《ど真ん中ストレート》

とは言っても直球で勝負することもある。例えばあくまでもしつけだと主張される方に対して、「叩くことは虐待に当たります」と根拠を示して伝えることもある。これは、「お役所が虐待に当たると言うのであれば、辞めるようにしよう」という捉え方の変化を期待するものである。しつけをしなければいけないという思いが強く、真面目な方には効果があるかもしれない。（実際に叩かなくはなり、腕立てや腹筋などを強要するようになった親もいるので使い方には要注意）

### 《頼み込む》

お願いだから叩くことだけでも辞めて欲しいと頼み込むこともある。これは、ある程度相手との関係性を感じている場面での方法となるが、アイツが頼むのだから聞いてやっても良いか・・・と思ってもらえることを期待する。このときに、子どもの心配はもちろんだか、「（叩いた人）が捕まらないようにしたいからお願いだし・・・」というニュアンスを含めると、叩いた人の存在を否定せず、守りたいという気持ちも伝わるかもしれない。こちら、叩く人を排除したいわけでは

ない。叩くという適切ではない行為を排除したいのである。

### 《メリット、デメリット》

叩くことのデメリット（怪我のこと、関係性のこと、エスカレートしやすいこと）などを伝えることは多いと思うが、叩くことに実はメリットがあることを伝えることもある。

暴力を用いることで、最初の方は確かに子どもが言うことも聞く場面があり、叩くことには実は、即効性が隠されているのである。まずはそのことをメリットとして伝え、（あくまでも即効性があることは認める）しかし、人は痛みに対して耐久性を備えているため、叩き続けることで、最初ほどの効果は得られなくなり、さらなる痛みを必要とするので、叩くことがエスカレートしてしまうという、結果としてデメリットに繋がることを説明する。その人の行為を全て否定するのではなく、一部だけは認め、しかし、そのことを継続することの不味さを知ってもらうのである。

また力関係で行動させるというパターンを子どもに誤学習させてしまう心配があると伝えることもある。このことも叩くことのデメリットである。子どもに将来、暴力を用いたら物事が解決できると思うような大人になって欲しいという親は少ないはずである。親として子どもを思う気持ちに訴えかけるのである。

### 《社会システムを伝える》

例えば、ニュースで児童虐待によって逮捕される事件があったとしてそのニュースを扱うこともあった。たいていの場合、ニュースになるようなことはしていないと言われてしまうが、児童相談所は、暴力を罰するための機関ではないが、警察などの司法に、結果として暴力を用いたことが伝わってしまうと、それは逮捕の対象になってしまう、もしかしたら、このニュースで逮捕されたと言われてい人も同じような状況かもしれない、などと説明し、社会の中で、全ての暴力が虐待と見なされる時代になっていることを伝えるのである。

### ～もう一度、ボールペンの話～

では、冒頭のボールペンの話に戻る。正直、このように書きながらも、実際どのようなやり取りがあったかは全く思い出せないし、おそらく記憶は変換されていると思われるので、そういったやり取りがあったかも怪しい。とは言え、目の前にボールペンがあったとして、「これはボールペンですか？」というような当たり前の質問はしたくないし、当たり前ではない質問をどうやってするのか、そのことを常に熟慮していかなければいけないと思う日々である。

『痴漢アカン』という言葉がある。痴漢がダメなことは誰でもわかっている。

同じように、虐待はダメだということも皆がわかっているはずである。子どもの安全を守るために、如何にして目の前の適切ではない行動を変換してもらうのか。それは、一方的にダメだと伝えるだけではなく、相手の行動に興味を持ち、こちらの質問を介して、こちらの働きかけに興味を持ってもらう工夫が必要であろう。何度でも言うが、叩くなと言われて、叩かなくなるのであれば、それほど楽なことではない。そうでないからこそ、この仕事は奥が深く、常に探求心が求められるのである。